
トワイライト・ゲート

月路 奈美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トワイライト・ゲート

【NZコード】

N1406D

【作者名】

月路 奈美

【あらすじ】

黄昏とは何なのかを、突如見知らぬ場所に来てしまった少女ティスとその住人タルの二人を中心にして描くファンタジー

見知らぬ世界と自分の名前（前書き）

始めて本格的に書く小説ですが、どうか最後までお付き合いください。間違つたところ等見つけてたら教えてください。

見知らぬ世界と自分の名前

プロローグ

黄昏から、人は何を連想するのか。

それはもちろん人によつて違つはずだ。それは人が思考能力を持つ生き物の証でもあつて、全ての人の考えが一つの意見のもとにまとまるはずなど無いことである。

ただし、例外といふものは何にでもあつた。同じ果樹園で栽培したリンクゴでも、全て収穫できるものとは限らない。それと同じである王国があつた。そこは、人間だけではなく翼や尻尾を生やした（人間いわく）『異形のもの』が住まう国でもあつた。もちろんそういう者達が『おろかな人間達』の支配下にとどまるはずも無く、広大で豊かな大地の上で皆、めいめいの生きる知恵を活用し、暮らしていた。国は平和とはいひ難かつたが、さまざまな種族がいるおかげで文化が恐ろしく発展していた。

しかし、である。姿から考えまでさまざまな者がいるにも関わらず、そこに住むものは全て口をそろえてこう言つた。

「黄昏とは、混純の時である」と。それは決してよい意味ではなかつた。

「オオオオオオオオオオ

暗闇に包まれた森の中、重いものを落としたかのような、凄まじい音がした。黄昏時のことだつたので、そこに住んでいる者達は震え上がつた。

直後、一筋の光が空に疾風のごとく吹き上がる。爆発がおき、一瞬間をおいてから最初を凌ぐほどの大騒音が響きわたつた。

爆発が起きた現場 深く地面が削られていた には、一人の少女が倒れていた。泥まみれで気を失っている。

高い背と、それに似合わない幼さが残る顔。13歳ぐらいに見えるが、童顔がそれを否定していた。それに、少女といつよりはむしろ少年に近いものがあり、賢そうな眉根と茶色の髪に白いTシャツ、ジーパンという格好だった。

少女は目を覚まさず、黄昏のわずかな闇が再びその場を支配した。

「いい加減にせんか、カル！！」

とある市場にて、少年が怒鳴られていた。通行人が何事かと振り返る。

「ほらほら、おっさん。そんなに怒鳴ると近所迷惑だぜ～？」

当の少年、カルはまるで反省した様子を見せない。それが彼の性格なのだ。毒舌で、皮肉屋。無責任で、お調子者。表向にはそうとしか感じられない彼と、名田上彼の保護者ということになつている赤ら顔のオヤジ、ハイアン・プロシア。彼らの喧嘩する声は、今日も街中にとどろいた。

「たかがリングゴを一個くすねたぐらいでそんなに怒るなよ。この辺りの人も、リングゴ一個と安眠のどちらがいいかと聞かれたら、迷うことなくリングゴを捨てるだろ？この俺がそれを食べてやろうと親切に言つてるんだ」

まとめて喋つたため、ここに一息。

「むしろ感謝して欲しいね」

この一言は、プロシアの堪忍袋を折るでは済まずに粉々にした。赤い顔がますます赤くなる。

まるで今問題になつてゐるリングゴみたいだ。カルは思い、惨めな気持ちなつた。弟の面倒を見なくちゃいけないのに、俺としたことが

…。

その時、カルにとつては幸運なことが起こつた。この町【エルロイ】の北東にある【エリキタ】の森の方から強烈な爆発音が聞こえ

たのだ。町人は皆、プロシアも含めて驚き、北東を向く。カルはその隙に逃げ出した。

見ると、【エリキタ】の中央部あたりから光の帯のようなものが空に向かって伸びていた。それは、木々や大岩をともなつていて、まるで森が浮遊しているようだった。

大地を揺るがす、神の怒り

カルは思わずこの国の神話の一節を思い出す。それが何の話の一節だったかは思い出せなかつたが。

このあとは何だつたつけ、とカルは呟く。確かに：

一度目の爆発音

驚いた人々が逃げ惑う。あちこちで起くる悲鳴。カルは目にも止めない。

「それに応える地の精の雄叫び……だつたか？」

とにかく、こんなに好奇心をくすぐるものを見逃す手はなかつた。カルは弟の存在を都合よく忘れるにして、森へ向かつた。町人は森の奥に行く道を知らないのだし、何より今はプロシアがいないのだから。

爆発の時に逃げたかな？とんまりしつつ、カルは歩く速度を速めた。

…ここは、どこだらう？

おそらく爆発の原因と思われる少女は、やつと目を覚ました。茶色の髪が風に揺れる。薄汚れてしまつた、その服も。

少女はしばしの間感慨にふけつた。

…頭が、痛い。

…体が、重い。

…何があつたんだつけ……？

無意識のうちに握っていたらしい手を開く。その時、始めて手を見た。思わず目を丸くし、息を呑む。

…何、これ？…魔法、陣？…

彼女の手の甲には、くつきりと焼け跡のようなものがあった。そして、それは手に六角星のようなもようを描き出している。とても痛々しい。

「……」「私はなぜこんな所に……？」

周りを見るが土と泥の壁しか見えない。自分はクレーターの中にいるのだろうか。

「隕石が落ちた……の……？」

少女の意識は再び途絶えた。

カルは【エリキタ】についてはよく知っているつもりだった。危険なところや、木の実の数。そして、そこに住む住人まで全て。しかし、今日の森はいつもとちがつた。濃い力がたまつていて、五感で簡単に感じることができる。鼻がむずむずした。

身軽さを活かして枝から枝に飛び移つたりぶら下がつたりしても、不安な気持ちは消えない。

「あ……」

カルは足先の感覚に恐怖感を覚え、下を向いた。

案の定、木のこぶにつま先が引っかかつており、耳元でうなつていた風がやんだ。そして豪快に転んだ。絶叫がこだまする。そのままカルは、かなりの高さを誇る【エリキタ】の大樹の枝の上から落下した。遠くかすんだ地面に向かつてまっさかさまに

「うわあああああああああ！」

目が覚めると、固い地面の感触が感じられた。

「そうか……あのまま俺は……」

驚き、目が丸くなる。

「えつ？！ ちよつ……あれ？！ 僕死んでないのかつ？！」

カルが一人で動搖する声が響いた。木々の間にも、もうどうに暮れた夜空にも。そして、少女が横たわる大穴の中にも。

…うう…

カルは知らなかつたが、その声は少女にももちろん聞き、少女は頭を起こした。

…いまのは？…人の声？…

しばしばんやりしていると、足音が聞こえた。動こうと思つたが、体中がとてもなく重い。

「た、たす…け…てえ」必死に助けを呼ぶが、のどに痛みが走り、囁き声にしかならない。

足音が遠ざかつてゆく。

…お願ひだから、気付いて…！…

「助け…助けて…！」

三度目にようやく声が出た。

足音が小走りで近づいてきて、誰かが顔を出した。

少女はその人物に向かつて懸命に呼びかける。声がかすれたが、それでも必死に。

「助けてください」と。

それがどんな人かも知らずに。

その人は強く地面をけると、いきなり飛びかかつてきた。隠し持つていた短刀を振りかざす。少女は息を呑み、重い体に鞭打つて避けた。そして、顔を上げる。

それは青年だつた。灰色の髪の中性的な青年。そして、自分の命を理由もなく奪おうとする 少女はそう思つた。

…なぜ、私の命を狙うの？…

口を開く間もなく、青年は再び斬りかかつてきた。その、あまりに殺氣に満ちた目に少女の腕に鳥肌が立つ。しかし、起き上がるうとした時腹部に力がはいらなかつた。

…お腹、怪我してたんだ…

おそらくさつきの一太刀の空氣圧のためだろう。次の攻撃はとても避けられそうにない。剣の刃はすぐ目の前にせまつっていた。

その瞬間、時が止まつたように感じた

…まだ、死にたくない！…

少女は強く思った。しかも、見ず知らずの人の手によつて疑問と戸惑いを覚えながら一生を終える。

…助けて…

そう思つた直後、走灯馬のよつなものが頭の中を突き抜けた。白い空間と、純白の衣をまとつた老人。見覚えがあつた。そして何かを喋つている。

「何？」少女は当惑を覚えつつもしつかりした口調で聞いた。老人の声は低かつた。しかし暖かい声だった。

『お…前…のほ…んとうの…名前…を、お…もいだ…せ…』

その言葉に少女は自問自答した。

…本当の名前？

…私の、名前…

…誰かが、呼んでる。誰…

しばし考え込む少女。わずかな間をおいて、その顔が明るくなる。

…あ…そうか…ここに来てからずっととそだつたんだ…

…なんで気付かなかつたんだろう…

…私を呼んでいたのは…

…私自身…

…私が自分の名前を思い出すとする心の叫びだつたんだ…

その瞬間、現実と走灯馬が重なりそして そして止まつていた時は動き出した。

新たに名を見出した少女は、顔を上げる。その、凜とした視線に絡みとられ、灰色の髪の青年は動けなくなつた。その瞬間、少女の口から不思議な声が漏れた。

「暴風よ、白き刃となりてわが敵の骨肉を断て」

もはやそれは子供とは思えない、低く、よく響く不思議な声だつ

た。

青年が目を丸くする。と、少女の背後に風が発生した。それは青年に向かつてまつすぐに突き進んできた。

カルは不思議な声を聞いた。よく響き、澄んでいて、まるで声ではない何かの音のような、そんなものでいて、確かに人の声だった。たぶん、すぐ近くだ。

「何故だ…？」

倒れ行く青年は呟く。低い声は少女の耳にも届いた。

「何故、お前が風の魔法を…」

青年の体には浅めの切り傷が多数あつた。

「あなたは、誰？」

相手の言葉をさえぎつて少女は問う。

「私が…？私は、エムリス…黄昏を滅ぼす使者だ…聖なるセレナの加護があらんことを」

少女は混乱し、言づ。

「黄昏…？それにセレナ？」

その時、第二の足音が近づいてきた。今度は子供のような、軽くて元気のいい音がした。

ふいに少女と同い年に見える誰かが、頭を突き出した。

それは少年だった。黒髪を後ろで束ね、浅黒く日焼けしたその少年は、いたずらっぽそうな口元と、切れ長の目を持ち合わせていた。少年が口を開く。

「あんた誰？」

唐突な質問に、少女は驚く。

「私？私、ティス」

少女は《思い出した》名前を紹介した。少年はひどかった。

「変な名前…」

「な、なに？！人の文句言つなら自分も名乗れ！」

「えらそーな女だな… わかつた、わかつたからそんなに睨むな」

「俺はカル・ステン。風の魔法が使える」

ティスは満足し、

「何だ」

という明るい声を上げる。

「は？ 何一人で納得してんだ？」

明らかに軽蔑した声を上げる少年を無視し、ティスはにっこりと笑う。

「変な名前」

これは後でわかることだが、カルは自分の名前をきにいつてたのだった。

「んだとおつ！－」彼は自分の保護者に負けず劣らずの大声を上げた。

「初対面の人あんた呼ばわりでいきなり名乗れって言つ方がおかしいじゃない？『んだとおつ！－』はこっちの台詞だよ」

初対面の少女が強く言い返してきたことに驚いたようで、カルの口はぽかんと開いていた。

「お前、口悪いな」

痛快な平手打ちの音が響いた。

カルはびっくりして頬をさすり、後ずさる。ティスが一步前に出る。カルがまた後ずさる。しばらくはこのやり取りの繰り返しだった。

家へ（前書き）

オイスター・ソース共々更新が遅れてすいません。

家へ

しばらくして、二人の間で半ば脅迫的な和解が成立した。その結果、ティスの体調があまりに悪いのでひとまずカルの家に行くことになったのだが、

「何でこんな重いんだテメエは…」 ブツクサ言いながらティスを背負うカル。

意外と良い奴かもしないというティスの心の声は撤回された。にもかかわらずその背中の温もりが心地よく、安堵が押し寄せた。

冷たい夜の空気を吸い込み、そして

「あ、コラ。寝てんじやね~よ。余計重くなるじゃね~か」

最後に聞こえたのはそんな声だった。

それからカルがどうやって自分を運んだのかは知らない。気が付くと、頭上に大量の葡萄がなっているのが見えた。

緑溢れる葡萄園と、普通なら木の家があるところなのだが、奥には大きな塔があつた。

「やつと起きたか。つたく。人の服にヨダレなんか垂らしやがって」

カルの文句も気にならないぐらい、ティスはびっくりしていた。周りを見るとなんと、自分達は広大な丘の上にいたのだ。遠くに町らしきものが見えた。

頭を前に戻す。塔は、白い石造りの岩に扉をつけたようなもので、美しくは無いが葡萄園の風景になじんでいた。

その扉は、ギイイイイイイッというけたたましい音を立てて開いた。二人が中に入る。驚いたことに、なかは木造だった。一階は、半円状に部屋を区切る扉がついており、その中からおいしそうな匂いがするところから、その部屋はキッチンらしかった。

「す」「…ここがあんた（カル）の家なんだ？」言つと同時に、少女らしさを満面に顔を綻ばせるティスだった。

カルは興奮してきやーきやー言つてゐるティスをイスの上に下ろし自分は額に手を当てて隣のイスに座り込んだ。

「おい、ルヴィディッド！ 下に降りて来い！」

大声で呼ぶと、ガシャーンという破壊できな音に続いて、小さな男の子が転がり落ちてきた。カルの弟、ルヴィディッドである。

「あ、兄ちゃん。どうしてこんなに遅かったの？ ハイアンさんが『夕食に間に合わないカルなんてオカシイ』ってすぐ心配してたよ…」

ルヴィディッドはそこで顔を上げた。小さな口がぽかんと開いている。

「兄ちゃん…」

「何だ？ ルヴィ」

「女人の人…連れてくるなんて」

「しようがないだろうー兄貴にしか治せないような怪我なんだから！」そして、言いながら八歳の義弟とティスの顔を見比べ、ため息をこらえた。

二人は實に似ていたのである。

ルヴィディッドという子は、本当にカルの弟だろうか。

ティスが六歳ぐらいに見えるその少年を見た時の、最初の感想だつた。はつきりいつて似ている点はどこにも見当たらず、ルヴィディッドはむしろ自分に似ていた。

赤毛、泣きぼくろはともかく、輪郭、目元、口元とその全てに漂う雰囲気は瓜二つだつた。双方とも互いの顔をよく見た瞬間、（ルヴィディッドにいたつては一度目になる）〇の字型に口が開いてしまつた。

そして、本来の年よりだいぶ幼く見える一人は、同時に言つた。

「 いれ、
誰 ?

家へ（後書き）

感想をお待ちしておりますー。もう少しだけ時間がかかる分ー、日中それを読み返してくると思います（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1406d/>

トワイライト・ゲート

2010年10月28日07時46分発行